学校生活についてのアンケート調査結果の概要

～ 集団における望ましい人間関係づくりに関する調査研究（中間報告） ～

栃木県総合教育センター研究調査部

○ 当センターでは、平成 18 年度、19 年度の2か年計画の「集団における望ましい人間関係づくりに関する調査研究」に取り組んでいます。

○ この研究の一環として、児童生徒の集団における望ましい人間関係を構築するための有効な手だてを探る目的で、平成 18 年 10 月に、38 項目からなる「学校生活についてのアンケート」を実施しました。

○ 対象は、県内の小学校第4学年と第6学年、中学校第1学年と第3学年の児童生徒から抽出し、合計 2,075 名から回答を得ました。

○ ここに紹介する概要では、学級集団における人間関係づくりに着目して調査結果を抜粋し、その特徴を次の四つの項目にまとめました。

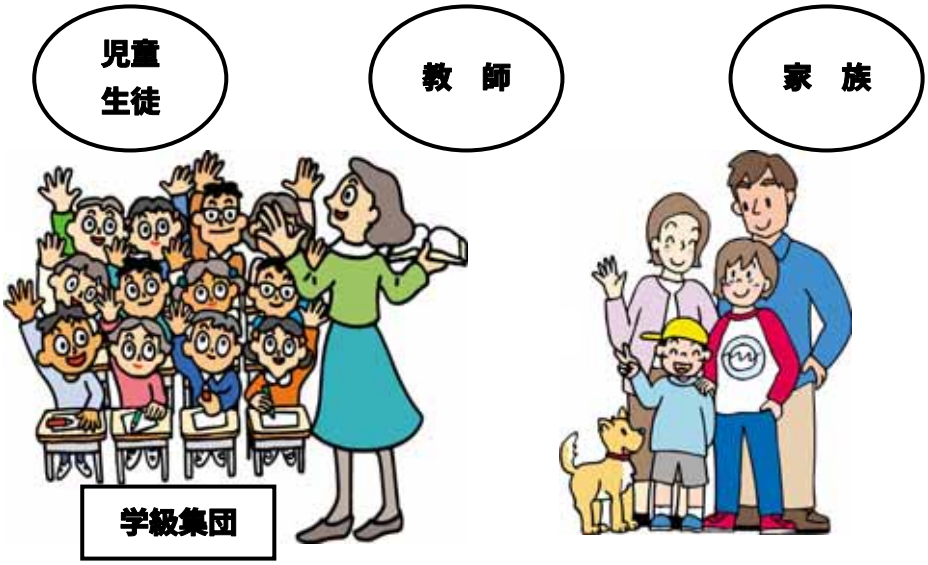
1 多くの児童生徒は、教師の指導を素直に受け止めています。

2 小学校中学年の段階から、子どもの自立は始まります。

3 日々の対話やコミュニケーションが、学級の居心地のよさにつながっています。

4 児童生徒は、話し合いや活動を通して、よりよい学級にしたいと願っています。

また、項目ごとに今後の取組の視点も示しましたので、学級経営、特別活動、児童生徒指導、キャリア教育･進路指導など、様々な指導･援助に活かしてください。



1　多くの児童生徒は、教師の指導を素直に受け止めています。

✧　**児童生徒にも分かる具体的な取組は、着実に成果が現れています。**

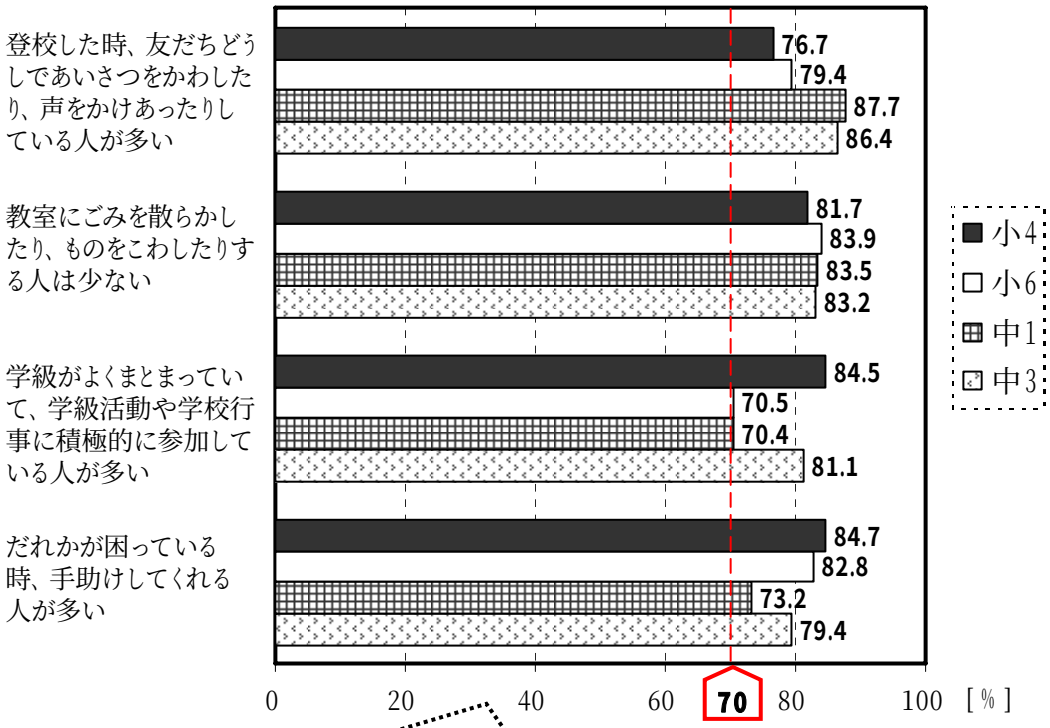
■　調査結果の特徴とその読み取り

教師は、日々の教育活動の中で、指導内容を言葉や動作に表して児童生徒に伝えようと努力しています。その中でも、「あいさつ」、「教室環境の整備」、「学校行事や学級活動への積極的な参加」などは、学校教育では不易とも言うべき大切な指導内容です。

図１－１のように、教師どうしの共通理解が図られていて、保護者にも理解が得られていると思われる項目については、いずれの学年でも肯定的回答（「そう思う」、「どちらかというとそう思う」）が７割を超える高い割合となっています。

図１－１　肯定的な回答の割合が高い項目（抜粋）

肯定的回答（%）：「そう思う」と「どちらかというとそう思う」の合計



《 選択肢は次の四つです。 》
「そう思う」、「どちらかというと そう思う」→肯定的回答
「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」→否定的回答
※　**以下、図１－２、図２－２についても選択肢は同じです。**

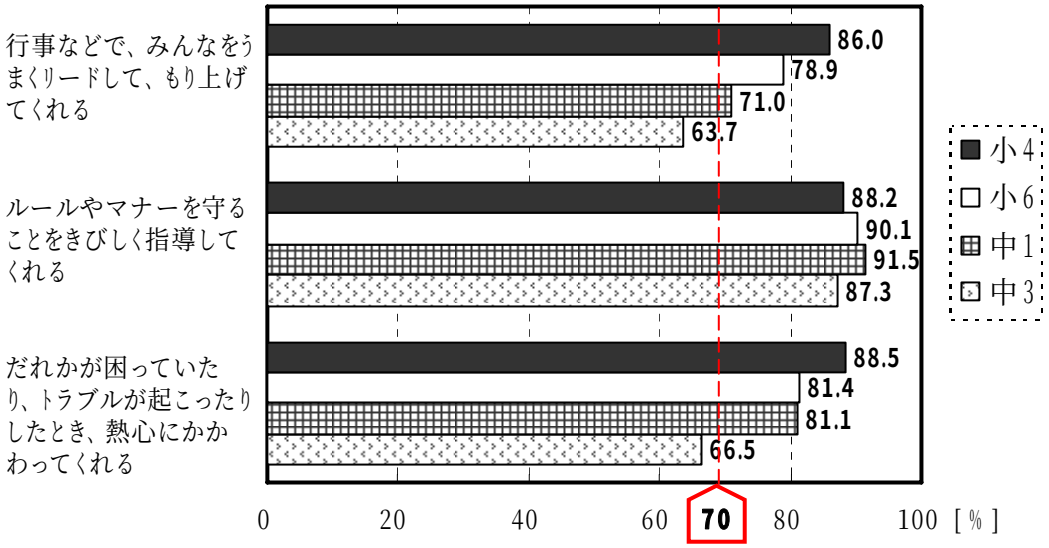
✧　**教師の積極的な指導や熱意は、児童生徒に確実に伝わっています。**

■　調査結果の特徴とその読み取り

「積極性」、「熱心さ」、「きびしさ」など、教師には様々な姿や役割が求められます。次の**図１－２**は、児童生徒がこうした教師の指導をどのように受け止めているかを示すものです。肯定的回答（「そう思う」、「どちらかというとそう思う」）の割合が、中３以外の学年では７割を超えています。指導にあたる教師の姿勢や熱意が、多くの児童生徒に伝わっていることがうかがえます。

図１－２　教師の指導に関する項目

肯定的回答（%）：「そう思う」と「どちらかというとそう思う」の合計



《　今後の取り組みの視点　》

学年が上がるにしたがって、全体に対する指導が難しくなったり、それまでと同じ指導が通じにくくなったりすることがあります。教師一人一人が指導内容を工夫するとともに、協働して指導にあたる姿勢を示すことが大切です。そのことで教師の思いが児童生徒に伝わり、徐々に指導の成果が現れてくると考えられます。

2　小学校中学年の段階から、子どもの自立は始まります。

✧ **学級の雰囲気や集団内の人間関係のとらえ方は、小４と小６との間で大きく異なります。**

■　調査結果の特徴とその読み取り

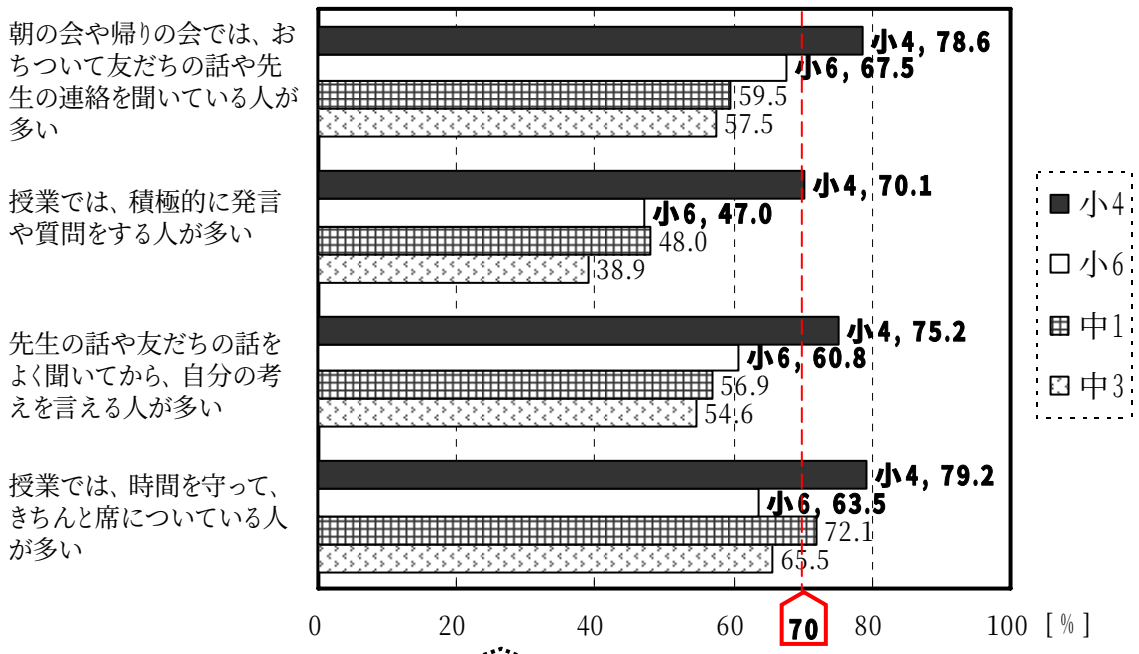
生徒指導上の様々な問題を考える場合、小学生と中学生との間での意識や行動の違いが気になるところです。しかし、今回の調査結果からは、小学校４年生と６年生との間で、児童の意識の変化が起こっていることが分かりました。

次の**図２－１**のように、肯定的回答について学年間の差に着目すると、小６と中１、中１と中３のそれぞれの学年間の差よりも、小４と小６との間の差の方が大きいことが分かります。

小学校の高学年になると、それまで教師の言葉かけに素直に返事をしたり、授業で積極的に発言をしたりしていた児童が、教師やまわりの友だちの言動や集団の雰囲気をうかがうような意識が強くなり、指導が難しくなることがあります。こうした児童生徒の意識や行動の変化が、アンケート調査の結果に反映したものと思われます。

図２－１　小４と小６との間の肯定的回答の差が大きい４項目

肯定的回答（%）：「そう思う」と「どちらかというとそう思う」の合計



※　この図では、小４と小６の肯定的回答の割合をゴチック体で強調して示しています。

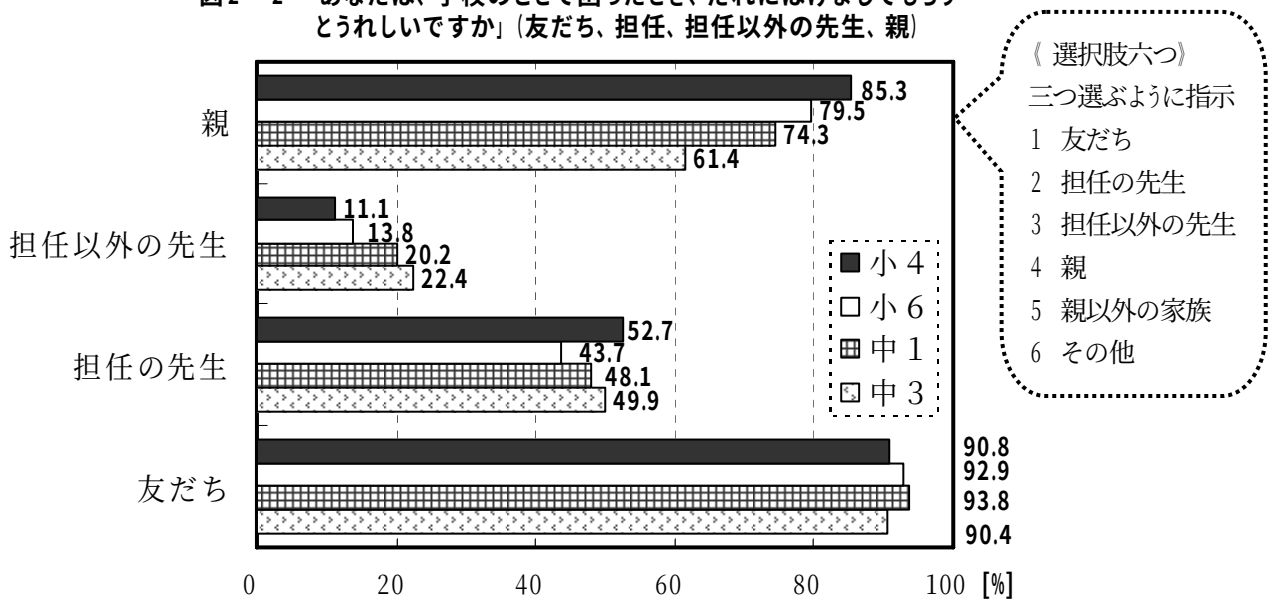
✧ **学年が上がるにつれて、友だちや教師などの家族以外の人々からの励ましや支えが重要になってきます。**

■　調査結果の特徴とその読み取り

次の**図２－２**を見ると、学校のことで困ったときに励ましてもらうとうれしい相手として、「友だち」と回答した児童生徒の割合は、いずれの学年でも９割を超えています。次に高い割合を示すのは「親」ですが、小４では８割を超えているのに対し、小６、中１、中３と学年が上がるにつれて低くなっています。「担任の先生」と回答した児童生徒は４割から５割前後で、「友だち」や「親」と比較すると低い割合ですが、「親」と違って、小６よりも中１、中３の割合が高くなっています。「担任以外の先生」については、「担任の先生」と比較すると半分に満たない割合ですが、「親」と違って、小４、小６、中１、中３の順に高くなっています。

家族との会話が中心であった幼児期と違って、小学校に入ると、友だちや担任の先生との会話が増え、さらに、中学校では、担任以外の先生と関わる機会が増えます。また、思春期になると、親から自立しようとする気持ちも強くなります。このような人間関係の広がりや自立意識の高まりなどが、アンケート調査の回答に表れていると考えられます。

図２－２　「あなたは、学校のことで困ったとき、だれにはげましてもらうとうれしいですか」（友だち、担任、担任以外の先生、親）



《 今後の取り組みの視点 》

小学校入学は、学校生活のスタートという大きな節目ですが、小学校4年生は、自立への第一歩を踏み出す節目と考えられます。われわれ教師は、このような発達段階の特徴を踏まえて指導にあたることが大切です。

また、児童生徒が自立していく過程では、人間関係の範囲が、家庭から学校、さらに社会へと広がっていきます。自立を促したり支えたりする人間関係として、小学校高学年から中学校の段階では、家族と並んで教師の存在が重要であるという考え方に立って指導にあたりましょう。

なお、自立に向けて踏み出すタイミングやテンポは、一人一人異なります。集団における人間関係づくりの指導は、ガイダンスとカウンセリングの両面からの指導が必要です。

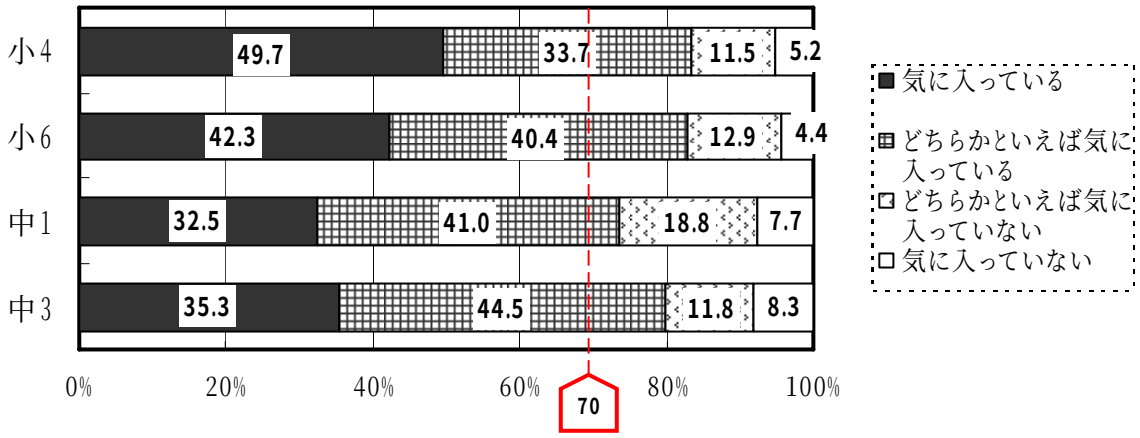
3　日々の対話やコミュニケーションが、学級の居心地のよさにつながっています。

✧ **友だちや先生といっしょに活動したり、対話したりすることが、「自分の学級を気に入っている」という気持ちと関連しています。**

■　調査結果の特徴とその読み取り（単純集計結果より）

図３－１のように、「あなたは自分の学級を気に入っていますか」という項目について、「気に入っている」または「どちらかというと気に入っている」のいずれかを回答した児童生徒の割合は、調査した全ての学年で７割を超えています。多くの児童生徒が学級に居心地のよさを感じていることが分かります。

図３－１　「あなたは自分の学級を気に入っていますか」



■　調査結果の特徴とその読み取り（クロス集計結果より）

ここでは、「あなたは自分の学級を気に入っていますか」という項目に対して、次の二つの項目との関連を見るクロス集計の結果を例として取り上げます。

・「だれかが困っているとき手助けしてくれる人が多い」**（図３－２）**
・「友だちはあなたの気持ちを考えて話を聞いてくれると思いますか」**（図３－３）**

手助けしてくれる人が多いと感じている児童ほど、学級を気に入っていると回答している割合が高く、友だちとの対話に関する項目についても同様の傾向が見られます。

以上のように、「お互いに助け合える」、「友だちに話を聞いてもらえる」など対話やコミュニケーションにおける信頼感、安心感といった要素が、「自分の学級を気に入っている」という意識に影響していることが推察されます。

なお、**図３－２、３**はどちらも小４の結果ですが、これらの二つの項目については、小６、中１、中３のいずれの学年でも同様の傾向が見られました。

図3－2 「だれかが困っている時、手助けしてくれる」×「自分の学級を気に入っている」(小4)

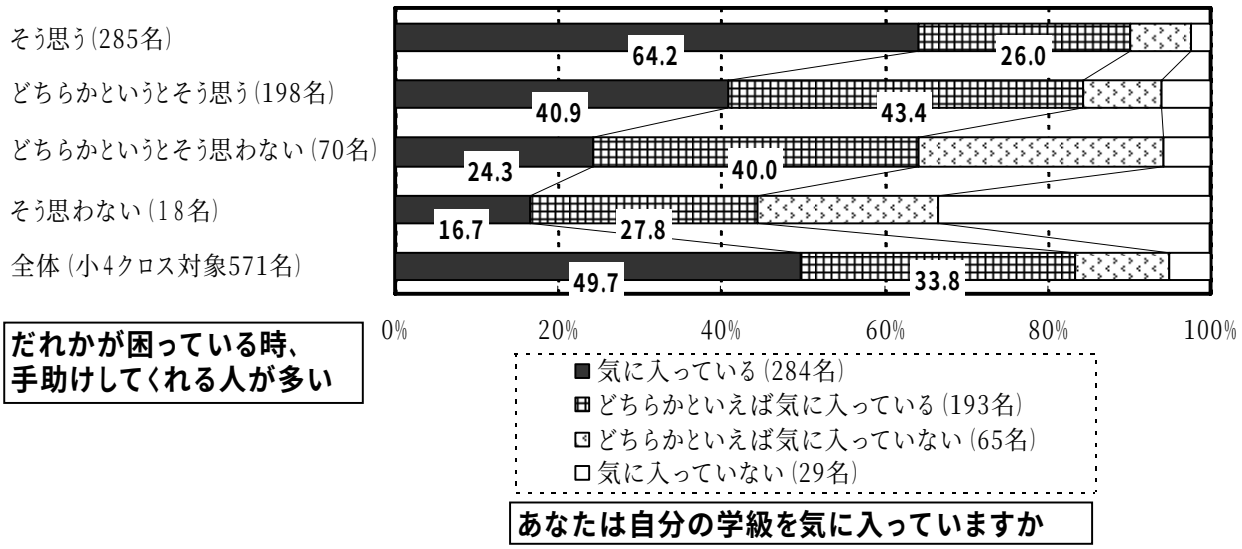
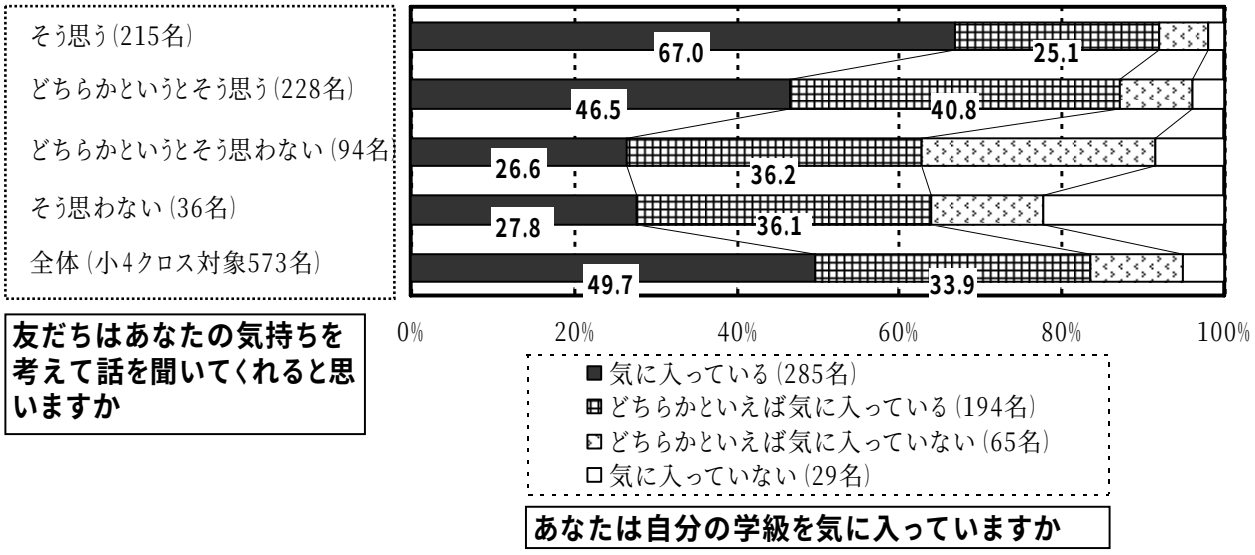


図3－3 「友だちは話を聞いてくれる」×「自分の学級を気に入っている」(小4)



《 今後の取り組みの視点 》

児童生徒どうし、あるいは教師と児童生徒との間での対話や日々の活動の一つ一つが人間関係づくりの基盤となります。特に、「落ち着いて人の話を聞く」、「相手を気遣って行動する」などの指導を重視して、対話やコミュニケーションに対する安心感、信頼感を高めることが大切です。

4　児童生徒は、話し合いや活動を通して、よりよい学級にしたいと願っています。

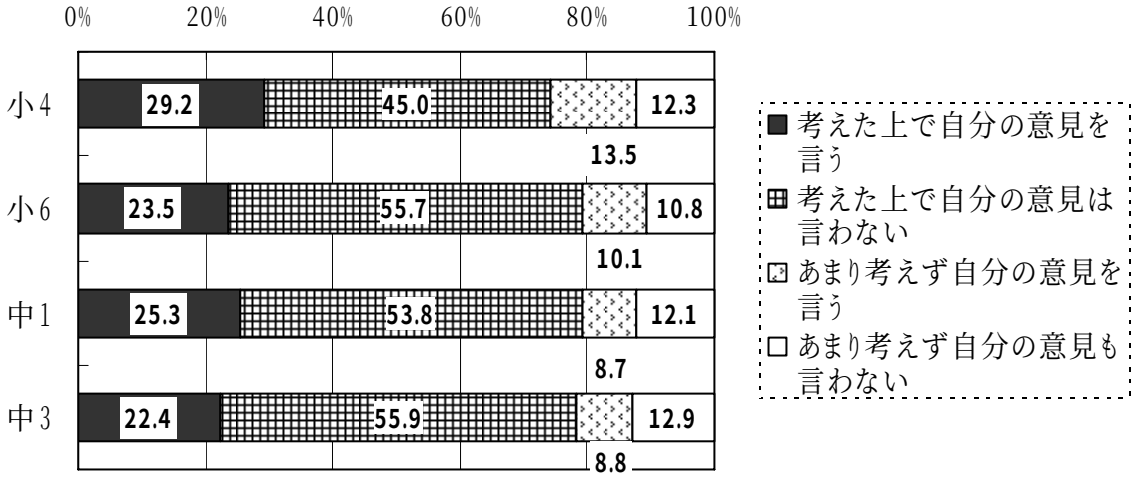
✧ **話し合いで友だちと考えや意見が対立した時の対応は、児童生徒にとってたいへん難しい課題です。自分の考えがあっても、言わないでいる児童生徒がたくさんいます。**

■　調査結果の特徴とその読み取り

図４－１のように、「あなたは、話し合いで、自分とちがう意見を友だちから先に言われたとき、どのようにすることが多いですか」という項目については、いずれの学年も、「考えた上で自分の意見は言わない」を選んだ児童生徒の割合が最も高くなっています。

この結果から、異なる意見を調整してまとめることは、児童生徒にとって難しい課題であることが分かります。

図４－１　「話し合いで、自分とちがう意見を友だちから先に言われたとき、どのようにすることが多いですか」



✧ **話し合いでいくつかの意見に分かれた時、多数決で早く決めてしまおうという児童生徒ばかりではありません。**

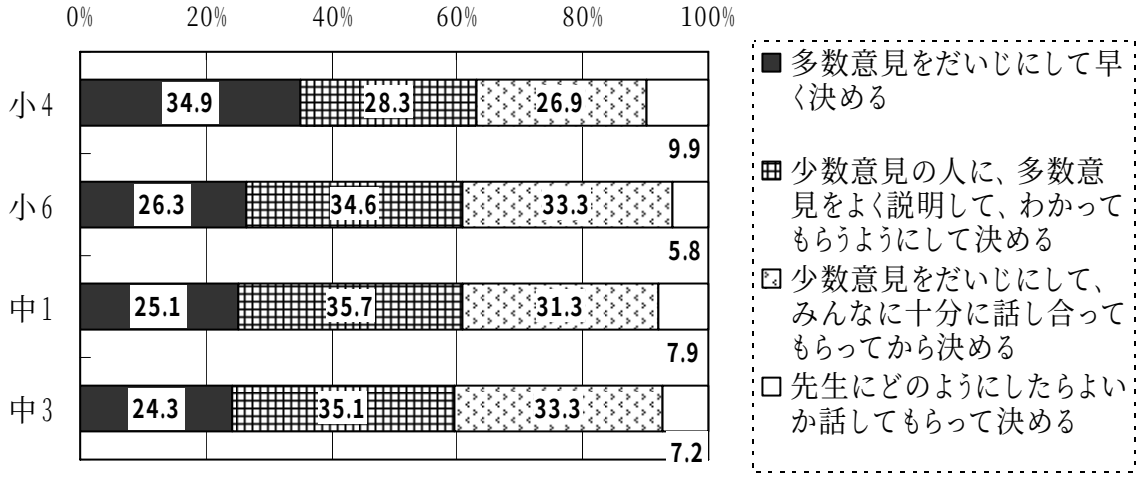
✧ **多くの児童生徒は、安易に多数決で決めてしまわないで、相手に納得してもらえるように説明したり、十分に話し合ったりしようとする気持ちをもっています。**

■　調査結果の特徴とその読み取り

図４－２のように、「話し合いの結果、いくつかの意見に分かれた場合、あなたはどのように司会を進めたいと思いますか」という項目については、小４では、「多数意見をだいじにして早く決める」が最も高い割合でした。これに対して、その他の学年では、「少数意見の人に、多数意見をよく説明して、わかってもらうようにして決める」、「少数意見をだいじにして、みんなに十分に話し合ってもらってから決める」などの方が高い割合を示しました。

この結果を見ると、多くの児童生徒は、友だちの意見に真摯に向き合うことや、お互いの考えを尊重し合うことを大切にしたいという気持ちをもっていることが分かります。

図４－２　「話し合いの結果、いくつかの意見に分かれた場合、あなたはどのように司会を進めたいと思いますか」



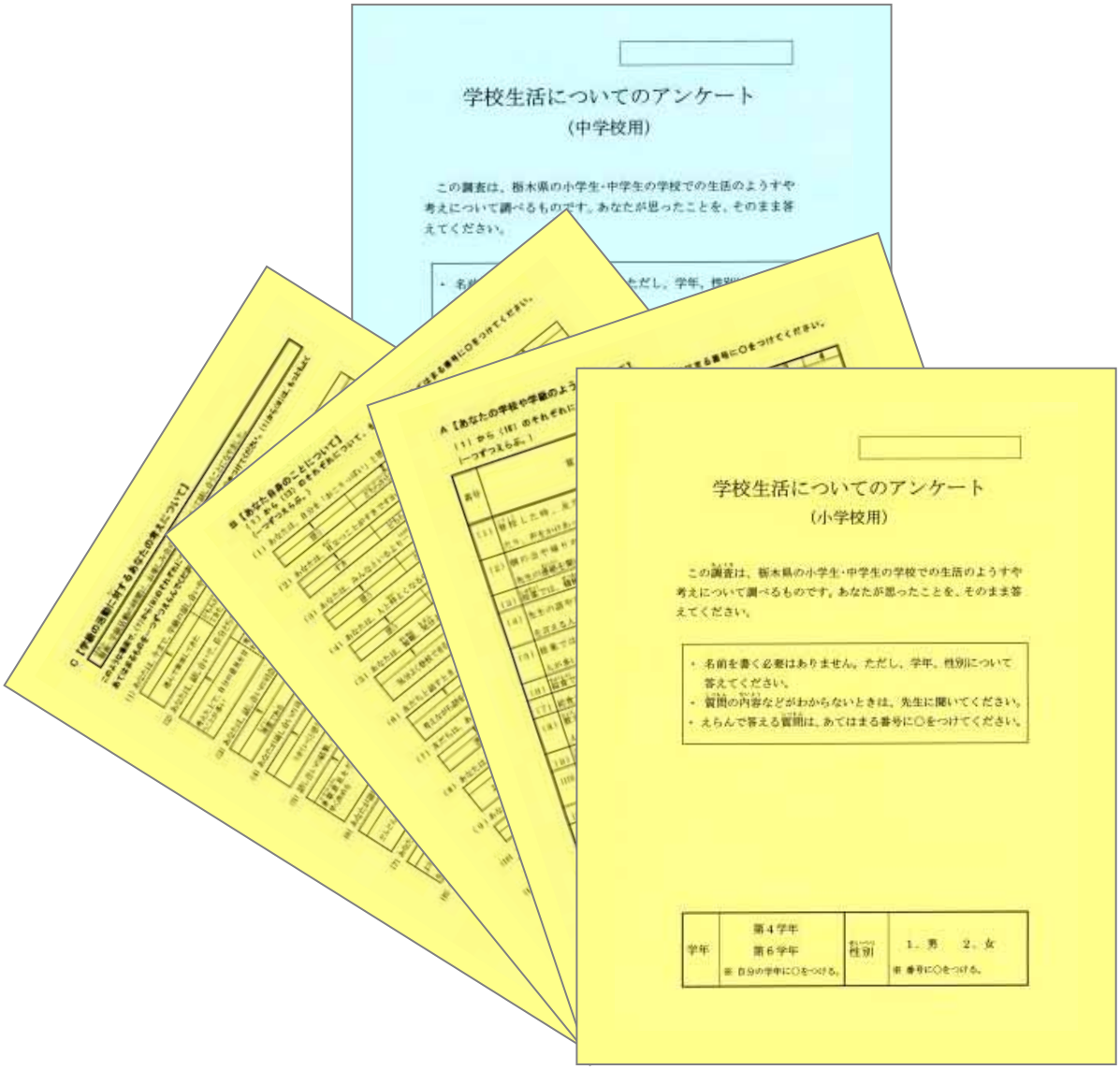
《　今後の取り組みの視点　》

話し合いや活動に参加する際には、建設的な意見を言ったり、意見をまとめたり、率先して行動したりするなどの積極的な態度と同時に、集団の人間関係やまわりの雰囲気を感じながら、他者の意見を理解したり、表情を読み取ったりするなどの、相手を気遣う態度の両面が大切です。これらの指導は、小学校段階からじっくりと時間をかけて取り組む必要があります。

自他を尊重した話し合いの仕方を身に付けさせる指導は、集団における人間関係づくりの構築にとても有効と考えられます。

- アンケート調査に関する以下の資料は、栃木県総合教育センターのホームページで公開しています。
  - ・学校生活についてのアンケート調査結果の概要（本資料）
  - ・アンケート調査用紙および調査の実施手順と留意事項
  - ・アンケート調査の単純集計結果
  - → 栃木県総合教育センター　http://www.tochigi-c.ed.jp/curriculum/
- アンケートの調査用紙は、ダウンロードできますので、各学校で自由にお使いください。
- 資料の活用についてのご質問やご相談は、栃木県総合教育センター研究調査部までお問い合わせ下さい。

（TEL）028-665-7204　（FAX）028-665-7303
（E－mail）cur-c@tochigi-c.ed.jp　（カリキュラムセンター専用）



※　アンケート調査用紙は、そのまま印刷して利用できる形式と調査項目を自由に加工できる形式の両方がありますので、ご活用ください。